

東工大附属工高

教育後援会だより

第5号

2004.3.1 発行

第四十五回弟燕祭 学校長講演

子供の夢・親の幻想

校長 石井彰三

皆様こんにちは、今日はPTA主催ということで、「子供の夢・親の幻想」という演題でお話いたしますが、二時間というお約束ですのでどうぞリラククスして聞いて下さい。

夢についてですが、まず、子供達はどんな夢を持っているのだろうかということ。また、子供達の夢に対して親はどう考えれば良いかというようなことをお話ししてみたいと思います。次に時代と世代、つまりお母様方の年代と私達（校長、昭和二十年生まれ）の年代と開きがあります、その影響がいろいろな社会現象に現れているようです、で、時代と世代による考え方の違いについてお話しします。さらに、科学者・技術者の実態をお話しします。そして最後に生き方の考察、哲学的ですけども「何故、人間は生きているのだろうか」という問題を考えてみたいと思います。

それではまず夢とは何かですが、「広辞苑」には、「将来実現したい願い、理想」とあります。将来、野球やサッカーのプロ選手になりたい

いとか、医者や弁護士になりたいなどの夢を持っている子供が沢山います。夢を実現するためには、将来自分は何になりたいという目的意識がないと夢は実現しません。本人の努力はもちろん必要です。しかし、努力してもできないことがあります。運とか才能が大きく左右する場合があります。さらに親や環境という要素も加わります。子供の立場にたって考えてみると、子供というのは親のことを無視することができず、また、親を強く意識するので自己規制してしまいます。結局、親のしがらみから自分で夢をつぶし、実現できなくなる傾向があります。このように子供が考えていることも認識していただきたいと思っています。

子供の夢・親の幻想

石井彰三



それでは親はどうかというと、子供にこうなってほしいという希望がありますが、自分の子供時代の経験から判断すると誤りのものとなります。子供の育て方について自分自身が自分の親から影響を受けているので、そういうものだと思います。多いものですが、これが誤りのものになります。子供に対しては傷つけない

ように、何気ない会話の中でも配慮が必要でしょう。それでなくても子供というのは、「本当はこうやりたかったんだけど、親のことを考えると決断できなかった」ということがしばしばあります。これは私の経験からいってもそうです。お子様達がわがままを言っているようですけれども、その前に自己規制をしていることもご理解していただきたいと思います。

次に時代の変遷と社会ですが、人間は時代の流れにいろいろな影響を受けるのですが、世代によって、十年ごとに考え方が違ってくるようです。例えば、昭和三十年代の日本では外壁が木の板である家屋があり、戸外で七輪で飯を焼いて夕食の準備をしていました。今なら木でできた外壁の家屋はだめですね。だって建築基準法で許可にならないですね。これは日本が良き時代というか、皆が戦後の苦しい時代から立ち直るためには、こういう生活に何も不満をいだかなかったという事です。しかし最近の親の世代はバブルの時代に青春時代を送った人達もいますから、リッチな状況です。高級マンションに住み、ベントのような高級車に乗っているという訳ですね。物質的な豊かさに対して精神的な豊かさはどうなったのでしょうか。しっかりした宗教観を持たず価値基準がいまいちな私達は、時代の影響を大きく受けるということがいえます。新聞の見出しですが、「キレる親・精神的に未熟な親」というのがありました。人は誤りを犯す。信じられないミスが目立つ。他人が見えない人が増えたなど、私達の状況が大きく変化してきているように見えます。科学や技術は大きく進歩しましたが、人間の考え方や感情は余り変化しないのではないかと思えます。とにかく夢はいつまでも失いたくないということを強調しておきます。

そこで、近年の社会的現象として、科学・技術の情報への関心の低さというのを考えてみたいと思います。日常生活や社会に出てから役立つと思う教科を見ると、中学生になると理科や数学への評価が下がってきているのです。つまり、子供時代に理科が嫌いだった人達は、科学・技術の情報への関心がやはり低いのです。社会はそれでも皆様のお子様達は附属工高に入ったのですから、ぜひ科学や技術に興味や関心を持ち、やがては理工系の大学に進学するようにお願いしたいし、いずれは科学や技術に関わる職業について人生を歩んでほしいと思っています。確かに今の現状では技術者の社会的地位や評価は低いのですが、産業界に貢献するよう使命を持って頑張ってほしいと思います。ただし、理学部と工学部では考え方が異なります。理学は原理・原則がしっかりしていますが、工学は物を作ればいいんだろう、物ができればいい」という精神ですから自由な発想をします。価値観は多様ですし、満足感や充実感はある個人的なものですから、その点では人生のあらゆるときの選択に正解はありません。正解はないのですが、その前に豊かな人間関係や豊かな感性がなければ正解に近いような人生と持っていないではないでしょうか。また、人としての倫理観をしっかりと持っていなければなりません。特にこれが一番大切だろうと思います。

最後に、大学や高校の役割は、「人間は何故生きるのか」とか、いわば真理を考えて人間の奥深さを育てていくことにあると思うのですが、この附属工高でも人間教育に重点をおいて、諸先生方が情熱を持って取り組んでおります。以上、「子供の夢・親の幻想」について話させていただきました。長時間、本当にありがとうございました。



附属工高の教育方針を さらに発展させて

前校長 入戸野 修

第四号では、附属での貴重な体験が現在の仕事の大きな支えになっていると書いた。昨年四月から福島大学の自然科学系学域「共生システム理工学類」を創設する事に携わってきたが、ここに来て平成十七年四月からの学生の受入れに向けて本格的準備が始動した。この学域では、人理解を中心に据えて、人・産業・環境を共生の視点で捉える科学技術教育を展開することを目標にしている。これは、附属で開発研究した「人と技術」の精神に通ずる大学版と言えます。ここには、高齢化社会で福祉関係や加齢による運動機能の支援をする事に付きたい人を育てる「人間支援システム専攻」、環境にやさしく付加価値の高いもの（材料・エネルギー・情報）づくりやシステム作りを行う分野で活躍したい人を育成する「産業システム工学専攻」、自然資源の質的・量的確保や水管理・保全に関わる仕事に付きたい人を育てる「環境システムマネジメント専攻」がある。附属工高では、体験・実践を通じて楽しみながら科学技術への興味と関心を育むことができるように教育課程を設けているが、この特徴を福大の理工学域でも同様に教育に取入れている。少人数によるきめ細かい修学指導体制により、将来の科学技術の発展と社会の福祉に寄与できる思慮と実行力に富んだ人材の育成を目指します。少し遠いが、附属の卒業生が進学してきて附属で学んだ精神を一層開花させてほしいなあと思っています。

附属工高にも新しい教育改革の流れの中で親大学と教育・研究面できざまな連携を通じて大きく発展していく時期が到来したと感じています。後援会として、今後も教育支援活動に微力ながら協力して行きたいと考えています。



時の流れ

教育後援会会長 松山悦子

十一年前、機械科に入学した娘が翌日からサッカー部のマネージャーとして入部したお陰で他校との試合の時には必ず見に行く様になり応援する中で沢山の友人もできました。

娘が卒業するまでの三年間、先生方のご指導のもとPTA役員書記、広報委員、広報委員長を勤め、大変楽しく充実した日々を送ることができました。また、気の合った意欲的な素晴らしい人達にも出会えました。

卒業後もその仲間と、入戸野元校長先生に命名していただいた弟燕同好会で毎年木工作品を作り、弟燕祭のPTA作品展展示会に出展してきました、アッという間に八年が経っていました。

このように楽しく過ごしてきましたが、今から四年前、突然いつもの橋川先生とは違った様子の電話がありました。この時の声は今でも耳に残っていて忘れられません。内容は、文部科学省の通達でPTA会費で運用してきたものが不可能になり、その分を補填する組織を作らなければならなくなったという重大な要件でした。微力な私でも何か役に立てばという思いだけで即答し役員を引き受けました。

会の名前も無くゼロからの出発でしたので、青木前副校長先生を中心に幾度も会議を重ねて、ようやく教育後援会を立ち上げることができました。今では、附属工高のために奨学寄附金を納入することができ、また生徒の学習、補習、生徒会やクラブ活動、修学旅行、スキー教室、合宿、生徒用備品等の購入などの支援に大いに役立っております。

これも会員の皆様方のご協力による賜物と役員一同心より感謝致しております。今後とも生徒のために、会員の皆様方のあたたかいご支援をよろしくお願いいたします。

国際交流の旅

前副校長 青木輝寿

二〇〇二年八月十四日 Breaking News, Black-Out N.Y (臨時ニュース、ニューヨーク大停電)が入った。それは私達夫婦がアメリカへ旅立つ三日前のことであった。航空券の購入もホテルの予約もすべて準備したのに、出発できるだろうか、お土産の「高砂」の木目込み人形を作る手を休めながら心配した。この旅は、ニューヨーク州ロングアイランドに住むハワード・ステープルスさんを訪ねることにあつたので、早速メールを送ると、翌日「停電は回復、地下室の自家発電で冷蔵庫は動いているので大丈夫、Aoki's Room が待っている」と、いつもものユーモアのある返事が返ってきた。安心して予定通りニューヨークへ向かった。着いてみるとニューヨーク空港の入国審査は長蛇の列で、停電の余波か、テロ防止の厳戒態勢か、厳しく荷物まで脱がされるの審査のため、私達は一時間半もかかってしまった。そんなこともあって二便遅れて深夜に着いたが、二日目予定通りナイアガラの滝を見学した。さてこのナイアガラの滝は、私が三十代の時訪ねた懐かしい場所である。滝周辺を散策したり、滝壺へは Maid of the Mist (霧の乙女)の遊覧船に乗船して滝を見上げたり、ダイナミックなアメリカ滝と整然と流れ落ちるカナダ滝の景観の違いを楽しんだりして、ゴート・アイランドにも渡った。とにかく、その水量の多さと時速六十kmで轟音を立てて流れる水流に驚嘆したし、野鳥などの自然観察も楽しむことができた。



さて三日目はロングアイランド半島への移動だ。ニューヨーク空港から、列車を乗り換えて

マンハッタンの東方、ロングアイランド半島のアイスリップへ向かった。そこには工高生交換交流で私がホーム・ステイしたステープルスご夫妻が待っていた。もう八年も前のことになるが、交換交流の委員の一人であった私は、第一回目の派遣で附属工高の二年生二人を連れて、アイスリップ技術センターを訪ねた。この目的は、お互いの国の技術教育を知り、友好を深めることであつた。真面目で積極的だった二人は、誰からも慕われ、好意的であつた。その時の技術担当が、お互いにホームステイした仲間で家族付き合いもあるステープルス先生だった。夕方懐かしのアイスリップ・テラスに着くと、色々和積った話に花が咲き、その中で私達夫婦で完成した翁と媪の「高砂」をプレゼントした。それには定年退職した者同士、これからも末永く健康で仲良くしていきたいという気持ちを含めたものだという説明を添えた。

四日目は、ビンヤードやワイナリー工場へのドライブだ。半島の東北端にあるブドウ畑からは良質のワインが採れる。お土産にと頂いたポトルを大事に抱えて次の見学地へ行った。ヨットハーバーがあり、そこは大西洋の荒波を避けるヨットが沢山並んでいた。予約していたレストランで食事をし、数々の案内を受けながら帰路に着いた。その日の夕方、娘さんや息子さんの家族も来てくれて、組み紐編みの披露や折り紙を折ったり、和服を着たり、アットホームな雰囲気の中で楽しい一時を過ごした。このようにして、一週間余りのニューヨークの旅は、友情を深め、マンハッタンでミュージカル「MANNA MIA」を楽しんで、実りある旅を締めくくった。



教育後援会の活動で携って!!

副会長 野村 三枝子

後援会がどういう目的を持っているのか、またその任務は何かなどよく理解できないまま気楽な気持ちで役員をお引き受けしてアッという間に四年が過ぎてしまいました。初めのうちは、何を仕事しているのかわからない事ばかりで大変でしたが、先生方・執行部の方々・PTAの方々のご協力で何とか続ける事ができました。楽しい時を過ごさせていただき本当にありがとうございました。

副会長 船倉 三恵子

サッカー部父母会の理事、弟燕同好会で六年間ご一緒した松山会長に、「後援会の副会長をお願い」と頼まれて、その場でOKしてから四年間無事に楽しく任務を果たすことができました。

私は常日頃、思いやりというか、心遣いが大切だと考えているので、副会長としての仕事は会長を補佐し、会がスムーズに運営できるように潤滑油の役割をする事でした。何とか成し終えてホッとしています。ありがとうございました。

会計 小谷 一啓

後援会の発足時に、会の運転資金がないため、弟燕祭に「バザー企画」して、在校生の保護者の皆様方から出展品をご協力していただくことを決めました。その結果、数多くの出展品を寄せていただき、最初のバザーが開かれたのです。その売上金額十五万円強が資金となり、何とか会を運営できると思ったことが一番印象に残っています。とにかく、今日まで存続しえた背景には多少とも苦勞がありました。ご支援ありがとうございました。



会計 遠藤 登美子

後援会発足時に役員に着くか否かの打診がありました時、娘が本校を卒業して四年も経っていましたので、正直とまどいしました。しかし、お世話になった工高に少しでもお役に立てればと思い、会計を引き受けました。

ゼロからのスタートで仕事の内容が中々見えませんでした。会議を重ねるたびに理解が深まりました。バザー、木工教室など仲間として保護者の方々と一緒に楽しく活動させていただきました。諸先生方のご指導に感謝しています。ありがとうございました。

書記 太田 万里子

後援会の役員を言われたとき正直言っただまどいもありましたが、子供たちの学校のためにと松山会長の言葉に励まされ、ついその気になって引き受けたのが昨日の事のように思えます。私自身多少とも自分の力を発揮することができ、微力ながら任務を果たせたのではないかと充実感で一杯です。

ただ残念な事は後援会についてまだまだ無関心な方がおられるということです。そうした方々にどうしたら関心を持ってもらえるかが今後の課題になると思います。工高の教育活動の活性化を願いつつ、ありがとうございました。

書記 横山 美枝子

後援会が生まれた時、その仕事の内容がどういふものなのか何もわからないまま書記という役員を引き受けました。書く事が得意でない私にとりまして、心配することもありましたが、諸先生方にご指導いただき、また執行部の皆様に助けていただいて微力ながら何とか任務を果たすことができました。活動を通して、数多くの保護者の方々と接する機会があり、楽しく勉強させていただきました。本当にありがとうございました。

東京建物見学

新企画である東京の建物見学として二月十八日(水)に、「三田綱町の三井倶楽部(旧三井別邸)」へ文化女子大学内田青蔵教授と本校地歴・公民科村田幸久教諭を講師にお迎えしてご案内していただきました。建物内外と庭園を見学・鑑賞して、ゆったりと楽しい一時をすごさせていただきました。

綱町三井倶楽部(旧三井別邸) 解説

文化女子大学教授 内田 青蔵

この建物は、三井家の貴賓接待所として大正二年(一九一三)に完成している。構造は煉瓦造、地下一階、地上二階の建物で、設計者はイギリス人建築家ジョサイヤ・コンドル(一八五二〜一九二〇)。

このコンドルこそ、わが国の高等建築教育学の基礎を確立した人物で、明治十年(一八七七)現在の東京大学建築学科の前身である工部大学の教師として招聘された建築家である。彼は、建築教育に従事し多くの日本人建築家を育てる傍ら、自らもわが国で多くの建築を設計した。初期の代表作として良く知られているわが国の欧化政策のシンボルでもあった鹿鳴館で、明治十六年(一八八三)に外国人専用のホテルとして建設された。晩年の作品としては、多くの邸宅建築が現存し明治二十九年(一九〇六)竣工の旧岩崎邸は国の重要文化財に指定されている。今回見学する綱町三井倶楽部は、コンドルの晩年の代表作であり、ルネッサンス様式を基調に建築の内外にバロック様式の要素を織り交ぜた格調高い建築である。また、庭園は江戸期の武家庭園を伝えるものとして知られている。

三井の歴史的背景

日本の三大財閥の一つ。十七世紀後半に三井高利が江戸に出て越後屋を開き呉服を商う(三越の前身)。後に江戸幕府の呉服商御用を勤め、また天和三年(一六八三)三井高利が三井両替店を開き、維新後明治七年(一八七四)「為替バンク三井組」として開業し、明治九年(一八七六)わが国最初の民間普通銀行として、三井銀行の設立が認可された。その年の三井物産の設立、さらに三池炭坑の払い下げなどにより、明治四十二年(一九〇九)三井合名会社を起して事業を統轄、やがて信託・保険をはじめあらゆる事業に手を伸ばして、日本第一の財閥となった。しかし、昭和二十二年(一九四七)独占禁止法・過度経済力集中排除法により財閥は解体して今日に至っている。

山川出版社「日本史小辞典」参照(Y・M)

見学地

綱町三井倶楽部(旧三井別邸)
東京都港区三田2-3-7

<p>三井倶楽部 〒106-8501 東京都港区三田2-3-7 TEL: 03-3433-1111</p>	
<p>三井倶楽部 TEL: 03-3433-1111</p>	

平成十五年度
後援会活動をふり返って



保護者の皆様のご参加によって、六月に小物入れ、十二月に壁かけ時計を製作する「木工教室」を開きました。そして、七月に前副校長の青木先生を講師として「パソコン教室」を開催しています。いずれも盛会で二十名以上の方々に参加して行われました。

弟燕祭における後援会主催のバザーは、十月十一・十二日両日に開かれ、実施に際し今年も保護者や教職員などの皆様方から数多くの出品品をいただき、合計二千点ほどになりました。両日で昨年の残品も含めて、完売となり、左記のように高額な売上金となりました。ご協力いただきました多くのの方々に厚く御礼申し上げます。

出品品は主として次のような種類に分類させていただきました。ご了承ください。

- タオル・シーツ類
- 装身具
- 衣類
- 刺繍手芸品・ポシェット・手提げ袋
- キッチン・バス・トイレ用品
- 本・漫画類
- キャラクター装飾品
- 食器・日用雑貨類
- 化粧品
- ゲーム機・ビデオ など

《バザー会計報告》

収入 売上金	一七〇、八五〇円	①
支出 準備材料	三、三三一円	②
① - ②	一六七、五一九円	

以上のように、一六七、五一九円を会運営の費用として充当させていただきます。

編集後記

石井校長先生をはじめ、青木・内田両先生、執行部や卒業生など皆様方のご協力をいただいで、格調高く優雅に発行できましたことは大きな喜びであり、感謝いたします。

また、今回も入戸野前校長先生からご寄稿をいただきました。誠にありがたく、ぜひご執説をお願いいたします。幸多かれ！
(Y・M)

「教育後援会だより」第5号

平成16年3月1日発行

東工大附属工高教育後援会

武蔵野市吉祥寺本町2-34-10

☎〇四二二二二六八四九

発行人 松山悦子

編集責任者 青木輝寿

野村三枝子

船倉三恵子

太田万里子

印刷所

株式会社 小松商店

東京都中央区日本橋人形町2-17-7

☎〇三三三六六六一七二九八